学会報告

第27回日本体育・スポーツ哲学会大会報告¹

井 上 誠 治 (愛媛大学)²

平成 17 年度日本体育・スポーツ哲学会第 27 回大会は、愛媛大学（愛媛県松山市）にて開催された。今回の学会大会でも、昨年に引き続いての東アジアにおける体育・スポーツ哲学の研究交流プログラムやシンポジウム等、例年通りの企画が盛り込まれた。大会は地方での開催にも関わらず、海外からの研究者を含む、73名の参加者によって盛会の中に開催された。大会プログラムは、以下の通りである。

【大会プログラム】

第 1 日目：8 月 20 日（土）

12:00～16:00 受付

13:00～13:10 開会式、会長挨拶

13:10～13:50 ウェルカム・スピーチ

動物が感じる魅力とは？－配偶者選びがもたらす進化の結末－

演者：柳澤康信（愛媛大学理事）

司会：井上誠治（愛媛大学）

14:00～15:30 一般研究発表①：研究交流プログラム

座長：畑 孝幸（長崎大学）

14:00～14:30 1. Kyu Ja Hwang (Han Yang University)

Phenomenological study into the dancing

14:30～15:00 2. Ming-Tsung Shin (National Taiwan Normal University)

The sacred in the world of sport

15:00～15:30 3. Li-Hong Hsu (Da-Yeh University)

Olympism : A paradigm of good ethos
of sport

15:40～17:20 特別企画

ゴルフの身体環境

演者：隅田 学（愛媛大学）

「GOLF」の自然観

舩本直文（首都大学東京）

映画『バガー・ヴァンスの伝説』が語りかけるもの

－ゴルファーとコースの共存性－

加藤泰樹（上越教育大学）

ゴルフの教育的価値を探る

司会：井上誠治（愛媛大学）

18:30～20:30 懇親会（会場：松山ワシントン
ホテルプラザ 2 F）

第 2 日目：8 月 21 日（日）

8:20～13:30 受付

8:50～10:20 一般研究発表②

座長：大橋道雄（東京学芸大学）

8:50～ 9:20 4. 久保正秋（東海大学） 身体
教育における「メディア」の検討
－教育メディアとしての「スポーツ」批判－

9:20～ 9:50 5. 林 修（瀬戸内市教育委員会）世阿弥の稽古論にみる身体知に
関する一考察（第 1 報）

－「花」の捉え方の変容に着目して－

9:50～10:20 6. 山口孝治（京都教育大学附

¹ Report on the 27th conference of Japan Society for the Philosophy of Sport and Physical Education

² Seiji INOUE, Faculty of Education, Ehime University,, 3 Bunkyo-cho, Matsuyama 790-8577, JAPAN

属京都小学校)

体育授業における教師の「戦略的
思考」に関する一考察
ーゲーム理論にもとづく教師の戦略
的思考の概念整備ー

10:25~11:25 一般研究発表③

座長：滝沢文雄（千葉大学）

10:25~10:55 7. 笠岡一行（上越教育大学大
学院）

運動指導におけるエンパワーメン
トに関する研究

10:55~11:25 8. 金澤一樹（上越教育大学大
学院）

運動学習による子どもたちの社会的
関係の生成について

ーハンドボールの学習場面からー

11:30~12:30 一般研究発表④

座長：服部豊示（明治薬科大学）

11:30~12:00 9. 高橋浩二（千葉大学研究生）

運動実践における身体的相互作用
についてージンメル of 相互作用論
からー

12:00~12:30 10. 田中 愛（東京学芸大学大
学院）

行為としての「他者への配慮」ー
配慮くされる>側からの考察ー

12:30~13:30 昼食, 理事会

13:30~15:30 シンポジウム

生とからだと体育を考える：実践からの体育
哲学ー「体はぐし」再考ー

コーディネーター：遠藤卓郎（筑波大学）

リーダー：村田芳子（筑波大学）

コメンテーター：木村真知子（奈良教育大学）

15:30~ 総会

第3日目：8月22日（月）

8:30~ ソーシャルプログラム：フィー

ルドフォーラム「片岡杯」（道後
ゴルフクラブ）

【学会総括】

第1日目は、片岡暁夫会長の開会挨拶に引き
続いて、柳澤康信氏（愛媛大学理事）による
ウェルカム・スピーチによって、学会大会の幕
を開けた。柳澤氏には、動物行動学の専門分野
から「動物が感じる魅力とは？ー配偶者選びが
もたらす進化の結末ー」と題しての講演をお願
いした。人間の運動の魅力に関連づけての講演
をという無理なお願いにも関わらず、氏の科学
的な視点からの洞察は、体育・スポーツ哲学研
究にとっても大変示唆的で意味ある発表であ
り、参加者も興味深く聞き入った様子であっ
た。

続いてのセッションでは、一般研究発表では
あるが、昨年と同様、東アジアにおける研究交
流プログラムの一貫として、韓国と台湾からの
演者を招いての発表が行われた。Kyu Ja Hwang
(Han Yang University), Ming-Tsung Shin
(National Taiwan Normal University), Li-Hong
Hsu (Da-Yeh University) の3名の演者の発表
は、いずれも東アジアにおけるスポーツ、ダン
スの哲学研究事情を伺う上で有意義なもので
あった。特に各々の討論では、基本的に英語で
のコミュニケーションを図りながら、座長畑孝
幸氏（長崎大学）の尽力とフロアーからの積極
的な質疑により活発な議論が交わされ、研究交
流の実を深めることができたと思われる。

第1日目最後のセッションは、特別企画とし
て「ゴルフの身体環境」と題しての討論が行わ
れた。演者には、理科教育を専門分野としてい
る隅田学氏（愛媛大学）に「『GOLF』の自然
観」、会員の舩本直文氏（首都大学東京）に
は、「映画『バグー・ヴァンスの伝説』が語り
かけるものーゴルファーとコースの共存性」、
加藤泰樹氏（上越教育大学）には、「ゴルフの
教育的価値を探る」と題しての発表をしていた
だいた。特別企画の狙いは、ゴルフの身体論を
通してスポーツの身体論へアプローチするとい

う試みであったが、演者自身の体験に基づく主張に対して、フロアーとの活発な質疑応答が交わされた。

尚、第1日目の夕方には松山ワシントンホテルプラザにて、学会参加者のほとんどが出席しての懇親会が開催され、和やかな雰囲気の中で、幅広い交流の輪を広げることができた。

第2日目最初のセッションは、一般研究発表として久保正秋氏（東海大学）による「身体教育における『メディア』の検討－教育メディアとしての『スポーツ』批判－」、林修氏（瀬戸内市教育委員会）による「世阿弥の稽古論にみる身体知に関する一考察（第1報）－『花』の捉え方の変容に着目して－」、山口孝治氏（京都教育大学附属京都小学校）による「体育授業における教師の『戦略的思考』に関する一考察－ゲーム理論にもとづく教師の戦略的思考の概念整備－」という新しい視点からの研究成果の発表が行われ、活発な討論が展開された。

第2セッションでは、一般研究発表として、笠岡一行氏（上越教育大学大学院）による「運動指導におけるエンパワーメントに関する研究」、そして金澤一樹氏（上越教育大学大学院）による「運動学習による子どもたちの社会的関係の生成について－ハンドボールの学習場面から－」という実践研究成果の発表が行われた。

第3セッションでも、一般研究発表として、高橋浩二氏（千葉大学研究生）の「運動実践における身体的相互作用について－ジンメル of 相互作用論から－」、田中愛氏（東京学芸大学大学院）の「行為としての『他者への配慮』－配慮<される>側からの考察－」と題しての身体

論に関わる研究成果の発表が行われた。

第2日目最後のプログラムは、今年度から新しい企画となるシンポジウム「生とからだと体育を考える：実践からの体育哲学－『体はぐし』再考－」が行われた。コーディネーターとして遠藤卓郎氏（筑波大学）、リーダーとして村田芳子氏（筑波大学）、コメンテーターとして木村真知子氏（奈良教育大学）を迎え、本学会では初めての試みとなるワークショップ形式での指導と活発な討論が行われた。実践形式でのシンポジウムであったため、和やかな雰囲気の中で、シンポジウムのタイトルそのままに「実践からの体育哲学」という来年度以降にさらに期待を抱かせる企画であった。

学会大会の総括として、最後に総会が行われ、第3日目のソーシャルプログラムを残して学会大会を閉幕した。大会全体を通して、本学会の特色ともなっているが、例年通り現職の先生や大学院生等が数多く参加し、活気のある大会になったと思われる。次年度の大阪大会での盛会を期待したい。最後にウェルカム・スピーチ、特別企画、シンポジウム等、大会企画にご協力頂いた先生方、並びに大会運営に準備段階から熱心に援助頂いた愛媛大学のスタッフ、大学院生の皆さんに厚くお礼申し上げます。

尚、第3日目は、学会の主要なプログラムとしてすっかり定着した観のある、ソーシャルプログラム「片岡杯」が絶好の天気の中に、片岡会長をはじめ24名の参加者によって開催された。ゴルフを楽しむことを一義としながらも、それは参加者同士の研究交流の場ともなっており、有意義な時間を過ごすことができたことを併せて報告致します。

受理 2006年5月22日